

わたしのアジア映画

中村藤生 スタッフ

昨年頃より、なぜアジア映画に目がいくのか考えてみたかった。最近、日本映画で充たされないものがある。それは映画を観たあとに、人間の強さ、やさしさが残らないことが多いと感じていることかと思っている。

昨秋、思い立って、第26回アジアフォーカス・福岡国際映画祭2016を訪れた。久方振りの九州。高校の修学旅行、20歳過ぎの出張仕事と鹿児島は桜島見たさ以来だ。9月19日午前6時20分発博多行。台風16号接近の荒れ模様の中、名駅前の高層ビルに雲がかかっているのを初めて見た。3時間20分で博多着、急ぎ会場のチャンネルシティユニイテッド・シネマへ向かう。3日間で10本の作品を観る。昼は博多らーめん、夜はもつ鍋などで一杯と至福の時間だ。

上映作品はアジア23ヶ国・地域から、新作・話題作を殆ど日本初公開。そして今回は「ベトナム大特集」が生まれ、メインプログラム17作品の上映とシンポジウムがある。日本最大・最新の福岡市官民あげての映画祭だ。上映後には司会者・通訳・監督の質疑が30分余あり、楽しく面白かった。限られた日程と予算に相談しながら以下の10本に絞った。

- ① 『凱里ブルース』中国(113分 監督ビィ・ガン)
- ② 『プラハからの手紙』インドネシア・チエコ(97分 アンガ・ドワイマス・サソニコ)
- ③ 『やさしいあなた』ベトナム(98分 レ・ヴァン・キエト)
- ④ 『風は記憶』トルコ・仏・独・ジョージア(126分 オズジヤン・アルペル)
- ⑤ 『クエンくさらば、ベルリンの壁より』ベトナム(98分 グエン・ファン・クアン・ビン)
- ⑥ 『くるみの木』カザフスタン(81分 エルラン・ヌルムハンベトフ)
- ⑦ 『緑の野に黄色い花』ベトナム(103分 ヴィクター・ブー)
- ⑧ 『ぼくは詩の王様と暮らした』フィリピン(89分 カルロ・エンシーソ・カトウ)
- ⑨ 『なりゆきな魂』日本(106分 瀬々敬久)
- ⑩ 『ハラル・ラブ』レバノン・独(95分 アサド・フラッドカー)

10作品の中から⑧『ぼくは詩の王様と暮らした』を取り上げたい。
フィリピン北東部は1991年ピナトウボ山の大噴火で、

火山灰と雨による土石流がパンパンガ州の村を破壊した。映画の舞台となる村は年長者を中心に土着の文化や言葉大切に残す風習が守られている。22歳の監督にとって初の長編作。名前のカトウは曾祖父が日本人の加藤からきている。風貌は日本大相撲の関取を思わせる。登場人物のほとんどは役者経験がない。

主演の高校生のぼく、ジェイピーが白い火山灰が舞う田舎道をバイクで「詩の王様」を探している場面から始まる。王様は今日の同窓会大会でスピーチするのだった。やっと思つてたがジェイピーはタガログ語、王様はパンパンガ語で話し、マイペースな王様と気持ち合わない。今は少数派のパンパンガ語だが、独特のリズムで謡うようなスピーチはなかなか聞かせる。ジェイピーは王様の言葉と文化への誇りを持つ気高さに次第に魅きつけられていく。その後、少年と老人の友情は、感情の波は起るが自然体で老人が亡くなるまで続く。村の新旧の様子も織り込みドキュメンタリー風の物語だ。白い火山灰に覆われた情景と、パンパンガ語で流れる詩を背景に村人のアイデンティティの重さが観る者に伝わってくる。火山灰の土石流は村人になにをもたらしたのか。また、フ

イリピンの多島国土は地域文化の発生・継続にどう関わっているのか考えさせられた。最後に、ジェイピーの清々しさは映画のラストへ向かうに従って拡がっていったことを付け加えたい。

今回、アジア各国の新作10本を集中的に観て感じることは、日本を除き、映画の背後にそれぞれの国が持つ政治・歴史性を抱えている。これは福岡2016の映画祭特有のものではないと思う。日本も明治から大正、昭和には戦争が世界と切り結びおびただしい死者も出たわけだが、沖繩を別としていわゆる内地で一般生活者が戦争に巻き込まれず、植民地ともなっていない。災害時でも死者を見せなくする。報道写真においても。日本は一見自由であるように見えるが、箱庭的なひとりよがりな映画が大多数ではないか。生々しい過酷な生活・歴史を背負う他のアジア映画から示唆を受け、自分なりの考える眼をもちたいと思う。この思いに近い気持を抱いた作品は②④⑤がある。いずれも長い国家歴史を幾多の表現者が映画制作を受け継ぎ、今回の上映につなげている流れを感じた。

②はインドネシアのスカルノが政権を追われた大混乱の中、チェコに留学した数百人もの学生は、故国へ戻れず流浪の民となった。その人達への深い愛情をプラハの美しい街並みと共に描いていて、描かれる葛藤は心にしみいる。

⑤は2002年『コウノトリの歌』で共同監督デビューしているので興味深く観た。本作の時代背景はベルリンの壁崩壊直前1989年。一人のベトナム人の若い妻がたどる暗く冷たい恋愛映画。75年のベトナム戦争後に起こる激動とドイツに夢を持ったベトナムの若者達がぐるぐる試練を、ダイナミックなアクションを交えて魅せる若い監督だ

④監督オズジャン・アルペルは1975トルコ生まれ。2011年『未来へつづく声』はクルド問題でトルコの闇を描いている。作風は混沌とした時代の中にあって静けさと民俗をベースとする視点を持ち、日本映画の小津と黒澤に大きな影響を受けたことを語っている。最新作の『風の記憶』については次の機会までじっくり考えてみたい。

